Chaucerの“The Miller’s Tale”における“Pryvetee”

柴田竹夫

“Pryvetee” in Chaucer’s “Miller’s Tale”

Takeo SHIBATA

要旨

チェーザー（Geoffrey Chaucer, 1340?-1400）の“The Miller’s”（「粉屋の話」）における“pryvetee”を話の中心として、この話の解釈を試みる。「粉屋の話」においては二つのlove trianglesが見られるが、それの解釈をする上で、“pryvetee”はa key wordとなっている。

キーワード：Geoffrey Chaucer, The Miller’s Tale, pryvetee, Medieval English Literature

1

チェーザー（Geoffrey Chaucer, 1340?-1400）の“The Miller’s Tale”（「粉屋の話」）1）は、『カンタベリー物語』（The Canterbury Tales）の中の一話で、その直前の騎士を語り手とするcourtlly love romanceである“The Knight’s Tale”（「騎士の話」）と対をなす。“The Knight’s Tale”においては、若く美しいEmsere姫を巡る、若き騎士PalamonとArciteの恋の争奪話であり、他方“The Miller’s Tale”は、二つのlove triangleを持った、世俗の恋の争奪話である。

宿の亭主（Host）は、騎士の次の語り手として修道僧（Monk）を指名するが、馬にちゃんと乗っておれないほど酒を飲みすぎた粉屋（Miller）（その名はRobyn）が割り込んで来て、自分が次の語り手になると言い張る。宿の亭主はこの粉屋を彼女の次の語り手と認める。

この粉屋は、饒舌で割り込む時にこう言う。夫というもの、「神の秘密」（Goddess pryvetee, 3164）や「妻の秘密」（pryvetee of his wyf, 3164）を詮索してはいけない、妻の中に神の豊かさ（Goddess foyson, 3165）を見つけられれば、他に何も詮議だてる必要がないと、巡礼一行に一見まともな「教訓」を垂れる。この“pryvetee”には“mysteries”の他に“privy parts”（この辺から何かありそうな暗示を感じる）を含意する。2）そして語り手の粉屋の言う“Goddess pryvetee”という言葉は、「粉屋の話」において、二つのlove triangleを解釈する上で、a key wordとなっていいる。この“pryvetee”という言葉を手掛かりに「粉屋の話」の解釈を試みたい。

2

大工のJohn、彼の貧しい下宿学生Nicholas、伊達男AbsolonそしてJohnの妻Alisonの四者の人物像から見てみよう。3）
まず34行（II. 3187—3220）にあたり描写されたNicholasから始まる。彼は論理学を学んでいたが、興味は占星術（astrology）に移る。いつ日出りとなるか、いつ雨が降るか、時には何も起こらないも計算出来るわけである。

Nicholasには "hende" という epithet（修飾辞）が付けられるが、この "hende" は場面により様々な意味がある。handy, near at hand, courteous, gracious, polite, nice, gentle といった意味を有する ironically romantic epithetとして「粉屋の話」において11回も使用されている。

それはではNicholasはどの様な人物として描写されているのか。courty loveの秘めた恋(deerne love, 3200)や恋の楽しみを心得ており、抜け目が無く、秘事に好きで、見た目は乙女の様に優美である。連れも無く（"Allone, without any compaignye," 3204）一人住まい。（これは、"The Knight’s Tale"における若き騎士Arciteが死に住く時に発した言葉と同じであり、Nicholasの描写に世俗的にこだわっている。）部屋の中には占星術の様々な書物があり、薬草などが甘く匂う。夜毎に音楽を奏でる芳しい学生（sweete clerk）である。彼は、友人のお布施や収入で暮らしを立てている。

次に12行（II. 3221—3232）にわたるJohnの人物描写を見る。彼は、最近18歳年下の妻を迎え、彼女を自分の命以上に愛している。彼は嫉妬深く、というのも妻は、若くて好色（wyld and yong, 3225）だから。夫Johnは間男（a cokewold, 3226）されはしないかと常に心配を抱える「無学」な（his wit was rude, 3227）男である。

それはAlisonはどうであろうか。38行（II. 3233—70）にまたがるAlisonの生き生きとした人物描写は、わずか12行しかない夫Johnのしゃぼくれた描写と比較して、彼女の存在感を際立たせている。

語り手の粉屋は、Johnの描写の最後にJohnとAlisonの年齢の不約合いによる分不相応な結婚を指摘し、この場合夫は、その不約合いから来る悲しみに耐えるしかないと色々な含みを持たせた言い方をする。若くて好色な妻からひとり仕打ちを受け、コキュされる夫のJohnの行く末をここで暗示するわけである。

Alisonは、若くて美しい、目付きも色っぽい（3244）。彼女ほど陽気な（gay, 3254）潰刺とした（a joly colt, 3263）若い女（wench—girl, lass[somewhat derogatory], 3253—4）を想像もできないと語り手は言う。

この "wench" という言葉は、I. 3254では、"lower class women" の意味で、"lady"（貴婦人）とは対照的な存在である。"wench"について "The Manciple’s Tale, 220" の注には、「Not a respectable word in Chaucer’s eyes」と、更に "It is usually applied to lower-class women, especially servants." とある。

Alisonの紹介の箇所のI. 3268において、彼女は、花の "a piggesnye—pig’s eye"（OED s.v. pigsney）に例えられ、この言葉は、"wench"に相応しいものとされる。

この "wench" は、Alisonの紹介の箇所38行（II. 3233—70）において一度だけ使用され、それと同様の意味を持つ "lemman" (=sweetheart, mistress)（cf., I. 1788）という言葉は、I. 3278に始まり六ヶ所（II. 3278; 3280, 3700, 3705, 3719, 3726）において敷衍されており、しかもI. 3278においては "deerne love" と同行において使用されている。「lemman」についてD. V. W. Elliot（7）はこう指摘する。Chaucerは、lemmanをadulterous lust, treacherous love, rapeの意味に関して使用していると。かつてはcourtyに使われ、今は落ちぶれた言葉としてある "deerne" は、hende Nicholasのloveがどの様なものかを暗示する。

若く潰刺、好色なAlisonについて、"lady"ではなく "wench" と "lemman" と "deerne" の言葉を使うことにより、彼女のloveが、courty loveとは程遠い "adulterous lust" であり、"treacherous love" であることを語り手は、聴衆（読者）に共感させている。Alisonとhende Nicholasとのloveは、（先に指摘した様にNicholasのloveは、deerneであった）
adulterous, treacherous であることが、次第に明らかになる。

続いて l. 3312から l. 3338までの27行にわたるAbsolon の人物描写を見てみよう。

Absolon は、愉快で（jolif, 3339）、陽気な（gay, 3339）若者で、風采も良く、着こなし格好良く、ダンスもうまい。パイオンに合わせて歌を歌い、ギターも上手。町の酒場で楽しい酒場の
女がいれば彼が訪れないとところは無いと言うほど
女には目がない。

最後に語り手は、Absolon のことをこう言う。
“fartynge”（屁）には、多少神経質で、言葉の違い
には気難しい性質でことに。このことは、後に繰
り広げられるAbsolon 対 Alison と Nicholas の
騒動の伏線としてある。

誠実なAbsolon が、あくまで誠実に Alison に
恋のアプローチを試みられる程、彼自身関には
まり込み、ついには強烈な一発の“fartynge”を
受けるし、彼の Alison に対する真摯な求愛の言
葉使いも Alison には全く届かないという衰れな
姿に繋がる。

3

続いて Alison と John と Nicholas の三者間の
love triangle について見てみる。

ある日 Nicholas は、夫の John の留守中、
Alison と戯れて遊ぶ（rage and pleye, 3273）命
になる。Nicholas は女へのアプローチは積極的
であるし、狡猾かつ巧妙な（ful subtle and ful
queyte, 3275）である。Nicholas は、Alison の
隱し所（queyte=pudendum, 3276）をこっそり
(prively) 搀まえて、自分の想い（すなわち彼女と
一つになる事）が叶えられなければ死ぬと訴え
る。すると元気な Alison は、子馬のように跳び
上がり（colt, 3282; cf, a joly colt, 263）こう言う。

And seyde, “I wol nat kisse thee, by my fey!
Why, lat be!” quod she. “Lat be, Nicholas,
Or I wol crie ‘out, harrow’ and ‘alas’!

Do wey youre handes, for youre curteisye!”
(3284—7)

Nicholas 的恋のアプローチに対して、Alison は、
接吻をしないよう、両手を退けるよう、礼儀（
curteisye, 3287）を忘れないようにとひたすら
懇願する。Alison は自分に気があることを知っ
ていて、Nicholas は、彼女の “mercy” の懇願を
受け入れて手を出さない。

This Nicholas gan mercy for to crye,
And spak so faire, and profred him so faste,
That she hir love hym graunted atte laste,
And swoor hir ooth, by Seint Thomas of
Kent,
That she wol been at his commandement,
Whan that she may hir leyser nel espie.
(3288—93)

だが最後には Alison はどうしよう彼の一途な求愛
を受け入れて、彼の命のままになることを誓う。
Nicholas の巧みの技である。

ただこの時 Alison は、夫がひどい焼きもちだ
から、注意深く彼を見張っていて、目立たないよ
うにしないといけない、でなければ彼女は死ぬ以
外にない（夫は危険な男）と、Nicholas くれぐ
れも言う。そして最後まで二人の関係は明らかに
なることはない。

この様に誓う好色な Alison であるが、善良な（goode）彼女は、敬虔とは言えないにしろ、
宗教心を持っていると語り手は言う。

Cristes owene werkes for to wirche,
This goode wyf went on an holiday (=holy
day). (3308—99)

ここに Cristes owene werkes（神の御業）と男
女間の sex との世俗的関わりが示されている。他
方男女の sex に関しては、語り手も「神の豊穣」
（Goddes foyson=God’s plenty, 3165）と言う様
に，登場人物達は，強い関心を抱く。

かくして Nicholas と Alison の「秘密」
(pryvete) すなわち John にかかわる adulter-
ous lust, treacherous love が生まる。先ほど言及した Alison の注意に対して Nicholas は，大学
生と大工とでは，大学生が大工を騙すことは容易
いことと言う口振り。二人は誓いを立て，二人が
一つになる「時」を待つ。この「時」とは後日
起こる「ノアの洪水」の襲来の時である。

And thus they been accorded and yswnorn
To wayte a tyme, as I have told biforn.
(3301—2)

 Nicholas と Alison は，「妻の秘密」(pryvete
of his wyf, 3164) をその「時」まで守り通し，
John は，彼らの "pryvete" を知る由も無く，コ
キュされた夫として最後まで二人に騙され続ける。

この様な sely (=innocent, ignorance, hapless)
John は，姿が見えない下宿学生 Nicholas を心配
する。何が彼を悩ませているか，この世は確か
に変わりやすいと思うと，下男の Robyn に，下
宿に居るはずの彼の様子を見に行かせる。ここで
語り手は，John に "This world is now ful tikel
(=unstable), sikerily (=3428) と言わせているが，
John が親身に心配する Nicholas こそが，彼の
"tikel" の張本人になることを，ここでは知らな
い。John は最後まで自分が女房と Nicholas によっ
て虚偽にされたことに気付かず，皮肉な姿を聴衆
に見せる。

John の下男が，Nicholas の部屋のドアを叩い
ても一切返事は無い。ドアの下の所に穴を見つけ，
そこから中を覗き込むと，Nicholas が放心状態
で座っており，早速下男は John にそのことを報
告する。

この時 John はこう思う。人間には何か起こる
かわからない，占星術のため気が違ったのか，何
かで苦しんでいるのか，「神の秘密」を探ろうと
したからこうなってしまったのか (3454)，自分
の様な「無学なもの」(a lewed man, 3455) の方
が良い，hende Nicholas をかえって気の毒に思
う (3462)。つまり無学な大工の John は，Nicho-
las の陰謀に気付かず，彼は「占星術」を使って
「神の秘密」を探ろうとしたせいで気が触れたの
dと勝手に思い込む。

下男にドアを外させた John は，部屋の中に入
ると Nicholas はただ石の様に黙って座り，上を
向いて大口を開けている。John は，悪霊から彼
を守ろうとして呪文を唱える。まんまと Nicho-
las の企みにはまる John である。

それに対し Nicholas は，深く溜め息をつく
こう言う。

And ate laste this hende Nicholas
Gan for to sik soore, and seyde, “allas!
Shal al the world be lost eftsoones now?”
(3487—9)

更にこうも言う。

This Nicholas answerde, “Fecche me
drynke,
And after wol I spoke in pryvete
Of certeyn thyng that toucheth me and thee.
I wol telle it noon oother man, certeyn.”
(3492—5)

ここに Nicholas の John に対する陰謀が始まる。
John に関わることを話そう，それも他人には断
じて秘密にして（in pryvete）おこうと言って
sely John を話に引き込む。

Nicholas は，John に他言は無用と誓わせる。

He seyde “John, myn hooste, lief and
deere,
Thou shalt upon thy trouthe swere me heere
That to no wight thou shalt this conseil
wreyre,
For it is Cristes conseil that I seye, (3501—4)
この話は「キリストの秘密」（Cristes conseil, 3504）であり、他人に話せば身の破滅、Nicholasを褒められれば罰を受けが荒うと散々“sely”なJohnを噴嘔する。それを恐れてJohnは、子どもに女房にも金輪際話したりしていないと誓う（3512）。

この様に念を押した上でNicholasは、selyJohnに「神の秘密」（Goddes pryvetee）を打ち明ける。それは「ノアの洪水（Noes flood）」にも似た大雨の襲来であった。

“Now John,“ quod Nicholas, “I wol nat lye, I have yfounde in myn astrologye, As I have looked in the moone bright, That now a Monday next, at quarter nyght, Shal falle a reyn, and that so wide and wood This world,” he seyde, “in lasse than an hour Shal al dreynt, so hidous is the shour. Thus shal mankynde drenche, and lese hir lyf.” (3514—21)

明日月曜日午後九時頃の恐ろしい大雨、それも降り始め一時間以内でこの世界は水浸しになるという恐ろしい予言を信じ、selyJohnは、自分の女房Alisonを心から心配する。

This carpenter answerde, “Alas, myn wyf! And shal she drenche? Alas, myn Alisoun!” For sore of this he fil almoost adoun, And seyde, “Is ther no remedie in this cas?” (3522—25)

そして心配のあまりほとんど気を失う程に女房を思うJohnは、Nicholasの陰謀にまんまと嵌まれて、助かる「手立て」（remedie, 3525）を問う。するとNicholasは、Johnの弱みに付け込みこう念を押す。

“If thou wolt werken after lore and reed. Thou mayst nat werken after thyn owene heed; For thus seith Salomon, that was ful trewe: ‘Werk al by conseil, and thou shalt nat rewe.’” (3527—30)

ここでNicholasは、彼の考えや忠告に従わなければ助からないと追い込み、Johnは、恋女房を助けないとNicholasの言いなりになるしかない。

Nicholasは、自分の忠告に従えば大雨の災難を回避できることを保証した上で、大昔に起了「ノアの洪水」の話を持ち出す。Nicholasをすっかり信じるJohnである。

Nicholasは、Johnに具体的な救いの方法を指示する。NicholasとJohnとAlisonの三人の為に急いで大きな鉢（いわばノアの箱舟）を三つと一日分の食料を入れて、誰にも気付かれずに（3622—3），Johnの家の天井高く吊るすように、そして錬を切る斧も入れておくようにと。この際「ノアの洪水」から助かるのはこの三人だけで、Johnの下男のRobynと下女のGilleは救えないと言うが、このことについてNicholasは、次の様に誤魔化す。

Axe nat why, for though thou aske me, I wol nat tellen Goddes pryvetee. Suffiseth thee, but if thy wittes madde, To han as greet a grace as Noe hadde. Thy wyf shal I wel saven, out of doute. Go now thy wey, and speed thee hear-aboute. (3557—62)

とにかくJohnは、女房を助けたい一心で、Nicholasのいいなりになる。

このNicholasの誤魔化しにおいて、彼は再びいかにも何か深遠な「神の秘密」（Goddes pryvetee, 3558）を模倣してselyJohnには、RobynやGilleを助けられない理由は言えないと言う。さらに畳掛けてこう言う。「神の秘密」のことを知ろうとしなければ、ノアと同じ恩寵（grace, 3560）つまり救いが与えられ。かくし
For travaille of his goost he groneth soore,  
And eft he routeth, for his heed mislay.  
(3646—7)

He otherwise wasse Nicholas and Alison,  
That by trewe and by righte,  
John that was in bedde,  
Meant to sette him uppe,  
That his herte should be loft;  
In bisynesse of myrthe and of solas,  
Til that the belle of laudes gan to rynge,  
And freres in the chauncel gonne singe.  
(3654—6)

Here is a story of a man that was in love,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a song of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.  
Here is a story of a man that was a knave,  
And for to be well set in his hous,  
He gav him the bell of cade,  
And the bell of cade he gave him.
人々はJohnの妄想をあざ笑い、この男の災難を冗談（a jape）にしてしまう。かくしてJohnは、
気が狂った（wood, 3348）扱いを受ける。この様にAlisonとNicholasは、自分たちの陰謀を巧み
に隠す。

Alison, NicholasそしてJohnのlove triangleにおいては、若く美しいそして好色な女と若い
“hende”な男が、自分たちのloveの成就の為に結託し、善良で無学“sely”な男Johnを誘かす。
騙され仮にされた彼は、気が狂った扱いを受け、
他方この二人は、人知れずいい思いをし、無傷のままである。

4

次にAlison, NicholasそしてAbsolonのlove triangleについて見てみる。

陽気に愉快なAbsolonは、祭りの日には、教区の女房連に吊り香炉の香を焚き染めてやる。彼
は、女に色目を使うが、特に大工の女房のAlison
に懸想する。

She was so propre and sweete and likerous.
I dar wel sayn, if she hadde been a mous,
And he a cat, he wolde hire hente anon.
(3445—7)

夜ともなると恋心抑えがたくAbsolonは、得意
のギターを持って出かける。

For paramours he thoght he to wake.
And forth he gooth, jolif and amorous.
(3354—6)

大工の家の窓の側に来て、上品な小さな声で歌う。

“Now, deere lady, if thy wille be,

I praye yow that ye wole rewe on me,”
(3361—2)

この様にAbsolonは、Alisonにただ懐れ
（mercy）を請うばかりである。

Johnは、目を覚ませし、Alison共々Absolonの
歌声に気付く。かくしてjoly Absolonは、ひた
すら求愛を続ける。

Fro day to day this joly Absolon
So woweth hire that hym is wo bigon.
He waketh al the nyght and al the day;
(3371—3)

終には「恋の病」にかかり、夜も昼も眠れず。
彼女だけの小姓になるとまで誓ったり、ナイチン
ゲールの様に声を震わせて歌ったり、様々な贈り
物を贈ったりし、お金の付け避けもししたり、敏捷さ
や熟練を見る為にヘロデ王の役を演じたりと、
できる限りの求愛行動を試みるAbsolonではあ
るが、それでもAlisonの心を捕まえられない。
それはAlisonにはもう既にNicholasという恋
人がいるからで、そのことをAbsolonは知らな
い。Absolonの皮肉な姿である。

かくも淚くましい努力を重ねるjoly Absolon
に対してAlisonは、つれなく、ただ彼を馬鹿
(ape)にして笑いもの（jape）にするだけである。

And thus she maketh Absolon hire ape,
And al his ernest turneth til a jape.
(3389—90)

語り手の粉屋は、ここで一つの格言を持ち出す。

Men seyn right thus:“Alwey the nye alye
Maketh the ferre leeve to be looth.” (3392—3)
たりしても，Absolonの気持ちはAlisonの元には届かない。

AlisonのAbsolonに対する態度を見ると，つれないだけでなく，彼を笑い者にする底意地の悪さが見えてくる。

Absolonが，Alisonによって笑い者にされている時，hende Nicholasは，Alisonとの様に同意する。

That Nicholas shal shapen hym a while
This selye jealous housbonde to bigyle;
(3403—4)

つまり二人は，愚かで嫉妬深い無学な夫Johnを騙す一計を策じるのである。うまくゆけば彼女は，一晩中Nicholasの腕の中で眠れるというものである。

Nicholasは，即座にこの陰謀を実行に移す。下宿部屋に一，二日分の食料や飲み物を運び込み，Alisonに人にはこう答える様に申し付ける。彼（Nicholas）がどこに居るか自分は知らない，今日はまだ彼を見かけない，彼は病に掛かっている。

召使のどんな呼び声にも答えないと人に尋ねられたら答える様にと。

他方色好みのAbsolonは，Johnの居場所を僧から聞いて，家に帰っていないと勝手に思い込み，陽気で心も軽くこう思う。

And thoghthe，“Now is tyme to wake al nyght,
For sikiry I saugh hym nat stirynge
Aboute his dore, syn day began to sprynge.
(3672—4)

そしてAlisonに恋慕の情（love-longynge, 3679）を告白する。彼は，せめて「接吻」だけでもと願う。

My mouth hath iched al this longe day;
That is a signe of kissing ate leeste. (3682—3)

ここに，後に起こる「間違い所への接吻」のモチーフがはじまる。

"joly lover Absolon" (3688) は，一番鶏が鳴くと起き上がり，派手に着飾る。まず最初にやることはというと髪を梳く前に，良い髪をさせることが。何より女好きで伊達男のAbsolonである。

But first he cheweth greyn and lycorys,
To smellen sweete, er he hadde kembd his heer. (3690—1)

そして「恋の病」に罹った“sweete” (=precious, dear) なAbsolonは，Johnの家まで行き，聞き窓の下に立って，Alisonへの求愛の言葉を連ねる。言葉遣いには神経質なAbsolonである。

“What do ye, hony-comb, sweete Alisoun,
My faire bryd, my sweete cynamome?
Awaketh, lemmyn myn, and speketh to me!
Wel litel thynken ye upon my wo,
That for youre love I swete ther I go,
No wonder is thogh that I swelte and swete;
I moorne as dooth a lamb after the tete.
Ywis, lemmyn, I have swich love-longynge
That lik a turtel trewe is my moornynge,
I may nat ete na moore than a mayde.”
(3698—3707)

これほどまでに恋の病に罹って求愛するAbsolonは，Alisonは，相変わらずつれない。他に良い人が居るからと言って（実際Nicholasが居る）。

“Go fro the wyndow, Jakke fool,” she sayde;
“As help me God, it wol nat be ‘com pa me.’
I love another—and elles I were to blame—
Wel bet than thee, by Jhesu, Absolon.
Go forth thy wey, or I wol caste a ston,
And lat me slepe, a twenty devel wey!"  
(3708—13)

Absolon は、自分の Alison への愛を “trewelove” (3715) と思いつつも「接吻」しか望めない と知るや、きわめて現実的な判断を下す。この彼の「接吻」だけでもという切望を聞くと Alison は、こう言う。

“Thanne make the reedy,” quod she, “I come  
anon.” (3720)

この時 Alison は、Nicholas にこっそりと意地の悪いことを言う。

“Now hust, and thou shalt laughen al thy  
fill.” (3722)

Absolon を笑い者にしようというのである。

Lemman, thy grace, and sweete bryd, thyn  
oore (= mercy)!” (3726)

Alison は lemmen であり、wench な女である。

Alison は、こそとばかり窓を開けて、Absolon を「接吻」へと誘う。

“Have do,” quod she, “com of, and speed the  
faste,” (3728)

Absolon は、切望していた Alison との「接吻」 が叶うものと、口を良く拭き、窓から外に差し出された彼女の尻の「隠し所」（つまり尻の穴）に 「接吻」する。

This Absolon gan wyte his mouth ful drie.  
Derk was the nyght as pich, or as the cole,  
And at the wyndow out she putte hir hole,  
And Absolon, hym fil no bet ne wers,  
But with his mouth he kiste hir naked ers

Ful savourly, er he were war of this.  
Abak he stirte, and thoughte it was amys,  
For wel he wiste a womman hath no berd.  
H felte a thyng al rough and long yherd,  
And seyde, “Fy! Allas! What have I do?”  
(3730—9)

しかし女の口には普通髪が無いことに気付いた Absolon は、彼女の口へではなく、「間違い所」 に「接吻」したことにより気付く。

Alison は、“Tehee”（「ホホホ」）(3740) と笑って、窓をびしりと閉める。失意の Absolon は、 とぼとぼと帰って行く時にこんな声を耳にする。

“A berd! A berd! (= a beard! A trick!) quod  
hende Nicholas,  
“By Goddes corpus, this goth faire and weel.”  
(3742—3)

Nicholas がうまくいったと言うのを耳にして、  
sely (= innocent, hapless) Absolon は、怒りに震えて唇を噛む。二人しての手ひろい仕打ちに気付いたわけである。

And on his lippe he gan for anger byte,  
And to hymself he seyde, “I shal thee quyte  
(= pay back).” (3745—6)

すっかり Nicholas に仕返し (quyte) を鳴る  
Absolon である。

But Absolon, that seith ful ofte, “Allas!”  
“My soule bitake I unto Sathanas,  
But me were levere than al this toun,” quod  
he,  
“Of this despit awroken for to be.  
Allas,” quod he, “allas I ne hadde ybleynt!”  
(3749—53)

悲しみに暮れる Absolon は、魂を悪魔の手に渡
しても構わないと思うくらい侮辱の恨みを晴らしたい復讐心に溢れ、あんな事（つまり「接吻」）に後悔の念を抱く。

Absolon は、恋の病を完全に癒される結果になるが、代わりに、ひどい仕打ちによる心の痛み、悲しみがいつまでも残る。

His hoote love was cooid and al yqueynt;
For fro that tyme that he hadde kist hir ers,
Of paramours he sette nat a kers,
For he was heeled of his maladie.
Ful ofte paramours he gan deflie,
And weep as dooth a child that is ybete.
(3754—9)

帰途 Absolon は、知り合いの鍛冶屋の前を通りかかること、彼に炉の中にある焼けた鍛の刃を貸してくれるように頼む。

That hoote kultour in the chymenee heere,
As lene it me; I have therwithe to doone,
And I wol brynge it thee agayn ful soone.”
(3776—8)

快くそれを貸してくれる鍛冶屋である。

Absolon は、その焼けた鍛の刃を持って、こっそりと大工の家の窓の下に戻って来る。Absolon の復讐の始まりである。Absolon は Alison にこう言う。私の母が私くれた金の指輪を持ってきた (3794) で、自分に「接吻」してくれるという条件でその指輪をあげると。

Absolon が戻ってきたのを知って、Nicholas は、冗談を更に面白くしようと企む。つまり今度は Absolon に自分の尻への「接吻」をさせてようと言う企む。Absolon の復讐心も知らずに。

This wol I yeve thee, if thou me kissee.”
This Nicholas was risen for to pisse,
And thoughthe wolde amenden al the jape;
H sholde kisse his ers er that he scape.

And up the wyndowe dide he hastily,
And out his ers he putteth pryvely
Over the buttok, to the haunce-bon (=thigh);
(3797—3803)

そこで Nicholas が、捲った尻を窓の外に突き出すと、暗闇の中 Absolon は Alison の口の場所を確かめる為にこう言う。

“Spek, sweete bryd, I noot nat where thou art.”
(3805)

すると Nicholas は、直ちに雷鳴の様な大音響の屁 (a fart) を Absolon 目掛けて一発打ち鳴ます。

This Nicholas anon leet fle a fart
As greet as it had been a thonder-dent,
That with the strook he was almost yblent;
(3806—8)

屁には少々神経質であった (3338) Absolon は、ほとんど目が潰れる思いをする。
しかしそれにもめげずに、「間違い所への接吻」と屁の仕返しに燃える Absolon は、直ちに焼けた熱い鍛の刃を Nicholas の尻目詰めてぶち込む。
するとその痛みに耐えかねた Nicholas は、尋常ならざる苦痛と共にこう叫ぶ。

“Help! Water! Water! Help, for Goddes herte!”
(3815)

こっ酷い仕打ちを Alison と Nicholas から受けた Absolon は、一体それに値する事をこの二人にしたのかというと、否。むしろ Absolon は、Alison による「恋の病」に罹った時、彼女以外のどんな女房からも何一つ教会への供物を受け取らないという仪礼（curteisie, 3351）を示し、いつもjoly に振舞い、Alison の愛をあの手この手とひたすら求める彼ではあるが、思い返せば、Alison は、人妻であるのを承知の上でこのために
あり、彼の目的は、ただ世俗的恋の成就なのである。その恋というのも好色な Alison という "wench", "lemman" の女の見かけの "deere love=courly love" なのである。

かくして Alison, Nicholas そして Absolon の三者間の love triangle からは次のような事が分かれる。

Alison と Nicholas の二人は、結託して Absolon を雇い、「間違いの所への接吻」へと導く、しかし joly Absolon は、大工の John とは違って、一方的にやられたらまま黙ってはいない。Nicholas に Absolon は、こっそり仕返し (quite) をする。

Nicholas がこの仕返しを受けた時に発した "Water" という言葉は、"The Miller's Tale" における「ノアの洪水」 (3818) を始動する鍵となる言葉である。Nicholas の発したこの言葉を聞いて大工の John は、「ノアの洪水」の襲来と思う。

かくして Nicholas は、Absolon を雇う Brunson は、Nicholas に仕返しをされ、それにより Nicholas は、「ノアの洪水」を始動し、John は、手酷い仕打ちを受ける。ただ一人 Alison だけがいい思いをし無傷のままである。

『アーサー王物語』における Arthur 王, 王妃 Guinevere そして円卓の騎士 Lancelot の道ならぬ恋（いわゆる eternal triangle）や、「騎士の話」における Emelye 姫と二人の騎士 Palamon と Arcite の lady を巡る courtly love romance における love triangle に際して、Alison, Nicholas そして Absolon あるいは John 達のそれは "wench" を巡る love triangle なのである。

5

Alison, Nicholas そして John の三者間の love triangle において、「ノアの洪水」をモチーフとしてこれらの三人の実体が見えた。何れも好色な Alison と hende Nicholas の二人は、「deceiver」として Alison の夫である大工の sely John を雇い、John は、「deceived」となる。そして Alison と Nicholas は、「wench」の love を成就する。

hende Nicholas は、占星術を良し、それを使って「ノアの洪水」騒動に見られる様に「神の秘密」 (Goddess pryvetee; Cristes conseil) を解いたと思わせて (John は最後まで疑いを抱かず), John を騙す。「神の秘密」は Alison との "wench" な love を糊塗するための言い訳の世俗的道具として使われており、Alison と Nicholas に繋わる「神の秘密」も「妻の秘密」 (pryvetee of wyf) も終にはばることは無い。

次に Alison, Nicholas そして Absolon の三者間の love triangle においては、「間違いの所への接吻」をモチーフとして、これら三人の実体が現れる。善良で好色な Alison と hende Nicholas の二人は、「deceiver」として joly Absolon を雇う。Absolon は、「deceived」となる。しかしやられても黙っていない Absolon は、Nicholas に対して、思いもよらない仕返しをする（本来は Alison が仕返しを受けるところを、Nicholas が自らの欲望に突き動かされ、不意に代わってしまった心ざしも受けてしまった）。

"wench"な love をする Alison だが、「妻の秘密」は終にはばれない。「The Miller's Tale」の締め括りにおいて、語り手の粉屋は、こう言う。

And every wight gan laughen at this stryf.
Thus swyved was this carpenteris wyf,
For al his kepyng and his jalousye,
And Absolon hath kist hir nether ye,
And Nicholsa is scalded in the towte.
(3849—53)

John も Nicholas も Absolon も手酷い仕打ちを被るが、一人 Alison だけがなんら痛い目に会わない。それどころか妻の秘密は守られて、女の喜びを得るだけである。

夫は「神の秘密」も「妻の秘密」も詮索すべきではないと、語り手の粉屋は、話の前口上で、イニチキな秘密を持つ人にとって都合の良い教訓を
垂れたが、これら「秘密」(pryvetee) は、世俗的な欲望とその成就を隠す為に使われる世俗的な道具立てとしてあると言えよう。

注
2）Ibid., p.842, note to l. 3164.

3）登場人物描写行数の割合
   Alison : Nicholas : Absolon : John
   = 38 : 34 : 27 : 12
   = 3 : 3 : 2 : 1

4）L. D. Benson, p.843, note to l. 3199.
5）Ibid., p. 843, note to l. 3200: deerne love: The "secret" love of courtly tradition.
6）Ibid., p. 954, note to l. 220.